



発行2009年12月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hazaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

.....
ハンザキ研をめぐるスター⑭

キツネ

キツネもタヌキもイヌ科に分類されている。昔から化かしあいであいで寓話にもよく登場している。動物園でも近い位置に飼育展示されているが、両方共に餌の臭いか糞の臭いなのか分からないが、臭くてあまりじっくりと見学した覚えが無い。自分自身にもあまり縁が無かったので、その生態についてほとんど知らない。タヌキと言えば文化庁記念物課の池田啓調査官(現在ではコウノトリの郷公園の研究部長)が専門である。キツネはどなたが専門なのか知らない。どうも、日本の動物園では外国産の珍しい動物の収集展示に偏りすぎた傾向があるように見える。もっともっと日本産の野生動物の調査研究が行われて飼育展示に生かされるといいのではないかと考えてしまう。門外漢の無知な勝手な言い分かもしれないが、やはり身近な環境のことを考える上では大切なことだと思う。



キャンプ広場で走り回る子ギツネ

ところで、ハンザキの調査ではキツネに3回出会っている。最初は成獣の死体が谷川に転がっていたもので、次は毛皮を剥がれて丸裸で川底に捨てられていたものである。何か分からず小さかったのでウサギかなと思ったが、小ギツネだった。毛皮を襟巻きにされてしまったのだろう。動物の死体に夜の川で出くわすと一瞬ギョッとなり、あまり出会いたくないものだ。一方で、生きている動物を見るのは楽しい。一晩中の調査を終えて朝食中に林縁から広がるテント広場に5匹の子ギツネが出てきて走り回ったのだ。親ギツネ2匹は林縁にジッと座り警戒しつつ子供たちを見張っていた。これは、旧・生野町営の魚ヶ滝荘でのことだった。数十分先で繰り広げられた光景は、夜間宿直者の餌付けによるものであったが、餌付けのよしあしは別にして、印象深いものだった。



写真1 毛皮をむかれた小ギツネの死体



写真2 旧・生野町立奥銀谷小学校 (2009年3月閉校)



写真3 黒川小中学校のミニチュア (奥銀谷小から里帰り)



写真4 出石川のハンザキ寝床
(ドライバーを差し込むとスキマができた)



写真5 建屋川のハンザキ寝床 (溶接されている)



写真6 右前肢が挟まれて動けなくなっていた

ハンザキの寝床

ハンザキは夜行性の強い動物である。夜行性と言われながら、昼間でも時々活動しているが、基本的には日中には隠れ家で休息している。河川工事に際して、ハンザキが多数生息していることが事前調査などで確認されると対策が検討される。河川は長いので上流や下流に移動させればいいのではないかと簡単に考えられることがあるがそれは問題だ。河川環境の中でバランスが取れて生息していた大型動物のハンザキが大量に移動されると、移動先で大混乱が惹起される。餌や隠れ家の絶対数が不足することが最大の問題だろう。そこで、工事期間中は人間の管理下におくことがベストと考えている。

人間の管理下ということは、人工的な施設に收容して飼育管理することになるのであるが、色々な問題がある。工事場所からの距離、飼育施設の状況・改良の必要性、管理できる人材の存在などが満たされるかどうかである。兵庫県では、平成2年災害の養父町の建屋川で約230個体のハンザキを大河内町の長谷の池で3年半、平成16年災害の出石川では413個体を豊岡市日高の個人のニジマス養殖池を借りて改造することで3年間、そして生野ダム下流域の工事に際しては、ハンザキ研の児童用のプールを改造した保護センターに88個体を收容中である。

養父の例では、私にとっても初めての事で50個体を滅失させた(死亡・脱走・不明)が、日本で初めての画期的な事例として、京大・松井教授からも滅失の少なさを認められた。出石の場合には、その前例があったにもかかわらず、50個体の滅失が問題視された。滅失率から考えれば前例よりも良い結果であったが、死体の確認できなかった数が多かったのが問題だと思う。建屋川では狭い池に收容した点が反省され、日高では広い池が3面確保できたものなぜ数多くの行方不明個体が出たのかが分からなかった。

生野ダム下流の工事現場からハンザキ研で預かることになってからは、面目の問題もあるが、私がほぼ全面的に観察し続けている。その中で、最初の滅失は健康診断の数日後に健康そうな個体で確認された。これは比較的大型個体で、取り扱い中に脊椎骨か内蔵へ圧力が掛かった結果かと考えている。次いで2個体と同じ日に滅失確認となった。寝床の半切りエンビ管の中で詰まって出れなくなつての溺死と考えられた。入れたものが出れないなんて考えられない事だった。しかし、後日、右前肢を、底板と半切りパイプの間に挟まれていた個体を見て、原因を理解することができた。建屋川では底板とパイプを溶接させていたのだが、出石川では請け負った業者が指示に従わず針金で固定したものを使っていたのだ。その寝床の一部をハンザキ研でも使用していたが、入る時には底板がたわんで入れるものの、入った後では締め付けられて動けなくなるのだ。些細なことかもしれないが、観察の大切さが改めてわかった。

多数の個体を收容し飼育するには、日々の観察も重要であるが、それだけでは滅失を減らすことはできない。現在では、月に1回の体重測定を行いながら体重減少の傾向のある個体は、隔離して餌を与えるようにしている。

生野町の小学校

ハンザキ研のある旧・黒川小学校は平成4年に閉校になっています。併設されていた黒川中学は昭和60年の閉校だそうです。共に大きな一枚岩の閉校記念碑が残されています。生野ダムから上流域の6集落の希望の灯り、年に何回かは顔を合わすことのできた場が無くなってしまったのです。次に閉校となったのは栃原小学校である。私が退職した年であり、使わせていただけるかどうか伺ったが、これから地区の皆さんが使い方を考えると言うことで、黒川小に向かったのだ。この栃原小学校もいよいよ解体されることに決定したそうである。残された机や椅子などの備品を頂いてきたが、“黒川小”と書かれた鍬があり、譜面台には“黒中”といった文字が残されていた。十数年ぶりの里帰りということになった。

今年の3月には奥銀谷（おくがなや）小学校が閉校となった。4つあった小学校が生野小学校のみになったということである。その生野小さえ、5年生が29名という数でハンザキ研に見学に来てくれた。より低学年の児童数はもっと少ないのではないかと思うと、この先どのようになって行くのか心配だ。奥銀谷小の備品も他の小中学校などが必要なものを運び出した後で、年末に備品類を頂きに出かけたのである。そこには、旧・黒川小・中学校のミニチュアが残されていた。卒業生であるスタッフがこれは是非再び黒川へ持ち帰りたいと言っているが、今回の搬出には無理があつて年が変わってからということになった。

廃校を歩いて物品を探し回ると本当にもったいないなと言うものが数多く残されている。ついついあれもこれもと、引っ張り出したが、3階から下ろすだけでも重労働である。しかし、持ち出さねばガラクタとしてゴミにされてしまう。顕微鏡も解剖顕微鏡も解剖器のセットも見つけて大喜びした。無論小学生用のものだから倍率も高くは無いが十分に使える。何でそんなものまでほしいの不思議がられてしまうが、使い方は色々ある。作り付けの棚のガラス戸は水槽の蓋に持ってこいである。水族館の飼育係はガラス切りもやるのだ。OHPの器具なんて何台もあつて早速試写してみたが十分に使えた。

3つの廃校からの備品、4つの町が合併した後の備品の山は、私にとっては宝の山だった。机・椅子・本棚・ロッカーその他数多くの備品があつという間に勢ぞろいしたのだ。見学に来られた方々へ説明すると初めて分かって、そうだったのかという表情が浮かぶ。揃っているのが当たり前のようにご覧になっていたのであろうが、初めは空っぽだったのである。図書室は第一から五までナンバリングしている。40年間、水族館に住み着いている間にたまりに溜った書籍やオオサンショウウオの報告書などが詰まっている。これは、退職直後に収容しきれずに近所のガレージをレンタルして詰めこんでいた。車を持たないのにガレージとは何とかしなければと言う状況に、本箱や教室が救いの手を差し伸べてくれたようなものだった。散逸させないで利用してもらえれば幸いだ。死後の書籍など家族にとってはゴミ以外の何者でもないのだから。

年間の来訪者

年	団体/人	公務	業務	地域	職員	報道	見学者	日直	栃本	総計
2005	1/8	12	2	9	15	0	0		19	65
2006	9/235	77	100	239	106	5	106		175	1,043
2007	24/383	187	157	232	112	143	268	(33)	290	1,805
2008	29/540	140	165	137	312	124	651	(480)	310	2,859
2009	13/211	168	214	113	393	57	1,110	716	328	3,310
合計	76/1,377	584	638	730	938	329	2,135	1,229	1,122	9,082

5年間でいつの間にか1,000日を越える滞在日数になっていた。この表では日直という項目を作ったが、2007年11月からのオオサンショウウオ保護センターの日常飼育管理を地域の2人の方をお願いしてきた分を記載忘れていたので、大体の回数を括弧書きで示した。2008年9月からは、当法人が委託を受けて管理することになったが、午前午後の2回の見周りに増やしたことによって数字が多くなっている。365日の2倍に達していない分は、私が代行した日数である。

団体の数が少なくなっているが、やはり受け入れ施設の整備が必要だろう。トイレが整備されればもっと積極的に団体誘致を働きかけることができ、一回当たりの人数もぐっと増えてくる。この表では事前に連絡のあった団体の数である。地域の黒川地区には80名ほどの人口しかないが平均すれば年に1回来ていただいていることになるものの、実数は20名ほどかと思う。公務と業務は分けにくい、公務員と業者と仕分けしている。職員はNPO法人のスタッフであり、2008年8月に認証を頂いてからの数である。

報道は、新聞記者や雑誌記者、テレビ収録などである。昨年は出石川の災害復旧工事が終わり、オオサンショウウオも原状復帰が済んだために取材回数が半減している。マスコミの声は大きいので、今後も広報活動には力を入れて行きたいと考えています。

見学者数が年間1,000人を超えましたが、フリーで飛び込んでくる方への対応に追われています。初めの頃は昼食中でも応対してきましたが、そうばかりできない状況になってきました。また、気づいたらお帰りになるところだったりしたこともあります。なにしろ広い校内ですから、隅のほうで作業していると気が付かないことも再々です。また、市内の各施設から紹介されてきた方も増えましたが、行ったら門が閉まっていたと言った苦情もあります。事前のアポがあれば合わせますが、食事や食料の調達に出かけることもありますので、事前に電話してくださいと言っても、電話の側にいないことが多いので、これも困ったことです。

私の滞在日数が328日になっていますが、残る37日はヤボ用で下界に降りていたということです。天国のような極楽のようなハンザキ研で暮らしていると、下界の忙しさや煩さが馬鹿馬鹿しくなってきました。皆さんもいかがでしょうか？

ハンザキ研日誌

2009年12月

- 1日 アオサギのネットくぐり脱走 (ハンザキの餌アマゴを狙って侵入したアオサギがネットをくぐって逃げようとしたが、羽を広げることができずにドテッと地面に落下)
- 2日 生野学園 21名見学に
- 3日 ・豊岡土木事務所・出石川の追跡調査中間報告に
・養父土木事務所・市川竹原野地区の最終工事について打ち合わせ
- 4日 神戸市立須磨海浜水族園の指定管理者がウエスコ等のグループに決定
- 7日 久し振りにアンコ淵へカワウ来襲
- 8日 ・オオサンショウウオの月例健康診断
・株式会社ズームス取材
- 13日 田口研究員・長谷会員と夜間調査 (9月の7夜調査の補填4) 1個体のみの確認
- 14日 ・河川ステーションに単管でテントの骨組みを作る
・大阪府安威川ダム建設事務所より事前打ち合わせに5名来所
- 15日 ・揖保川水系流域委員会、1年半ぶりに開催、開催9年目となる
・GS-294終了(11月27日～)
- 17日 安威川ダム建設環境委員会開催
- 18日 GS-295開始(～1月26日)
- 19日 ・事務局会議 7名出席
・ハンザキ研ニュースNo.47と2010年カレンダー発送
- 24日 ランデス野村氏他来所、新しい環境配慮型ブロックについて
- 25日 昨年3月に閉校になった奥銀谷小学校から備品の搬出第1回のベ軽トラック4台と2トトラック1台で
- 28日 仮設トイレ1基の配管凍結破裂修理
ハンザキ保護センターの3区画のドレーン立ち上げ細工終了
- 31日 3年連続の越年

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

今年も1年が終了した。年間の出入りの人数は3,310人になった。昨年は2,859人であり年々増えている。私自身の滞在日数も328日で記録更新である。団体での見学も13件211名である。このままの増加率で行けば、そろそろ一人での対応は限界が見えてくる。常勤のスタッフを1名抱えるだけの財政的な力が付くといいのだが、なかなか厳しい状況にある。有料の施設にできれば理想だが、そのためにはまだまだ整備が足りない。上下水道の問題が片付けば、もっと快適に利用していただけたらと思っており、県や市に解決してほしい最大の課題と考えているのだが・・・